

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「大阪のおっちゃん」

大阪府

交野市立第三中学校 1年

埜辺 綾香

おっちゃんとおっさんの違いがわかりますか？ 一文字違いで大違いなんてよくクイズでやったりしていますが、私の住む大阪ではこの一文字でえらいことになってしまいます。

「おっちゃんこれちょうだい」

「どれにする。こっちの方がうまいでー！」

知らないお店のおっちゃんと楽しく話をしながら買い物ができます。初めて行ったお店でもずっと通っているような感覚さえ感じます。たまに、おまけまでくれて得をすることもあります。

ところが、ここで間違って「おっさんこれちょうだい」になってしまった時は地獄の扉をノックしたようなものです。「誰がおっさんやね。おっちゃんやろ！ おっちゃん」無表情のおっちゃんがビシバシ、ツッコミを入れてきます。本当は怒ってはいないけど、すごい迫力のツッコミに少し後ずさりしそうです。小さい声で「おっちゃん、これちょうだい」と言うと「そやろ、おっちゃんやろ。気をつけなあかんで」今までとは違うめっちゃニコニコした笑顔になります。どこにそんな切り替えスイッチついとんねんってツッコミたくなるほどの変わりようです。

国語の授業では、様・さん・ちゃんなどを敬称と習います。敬称って名前からすると尊敬を表しているのだと思います。そのなかでも「ちゃん」より「さん」の方がランクは上と思うのに「さん」を付けると大変なことになるのはちょっと不思議。

おっちゃんがしょうもない話ばかりする時に「おっちゃん、あほやろ」って言うと、「そやねん、あほやねん。脳みそ豆腐みたいにつるつるや」めっちゃのりのりの楽しい返事がニコニコ顔で返ってきます。ここで間違っても「おっちゃん、ばかやろ」は絶対にだめです。さっきと同じように怖いおっちゃんにスイッチONです。

スイッチの入る基準は難しい理由がある訳でもなく、雰囲気や音の響きであったり、大阪独特の感性がON・OFFを操っているみたい。怒っているように聞こえることも多い大阪弁ですが、実際は少しも怒っていなくてコミュニケーションとして楽しんでいるだけなのです。自分の気持ちをストレートに表現できる言葉で温かみのある言葉に感じます。

大阪弁は、ちょうど焼きたてたこ焼きのような感じかもしれません。丸くてぽわーんとして温かい、でも中は火傷するくらい熱い。この外側の丸くて柔らかい部分を感じるか、中の火傷するほどの熱々とするの部分を感じるかで優しさや心地よさを感じたり、怖さや敬遠したい気持ちを感じる違いが出てくるのかもしれない。

今日もどこかでこの温かいボケとツツコミの会話が、街のあちらこちらで花を咲かせています。